

総合基礎実技アーカイブ

2018年度活動報告

半世紀近く続く、美術学部1回生全員を対象とした半年間の総合基礎実技。そのアーカイブ化の作業は今年で5年目を迎えた。作業は毎年50万円の予算の枠内で、2名の非常勤講師が都合に応じてそのつど臨機応変に行っている。今年度は12月17日と20日、2月11日～15日および同18日の計8日間、各々10時から19時まで集中的に作業を行った。1970年代から順次記録などをスキャンしてデジタル化を進めており、今年度は東山から沓掛への移転をはさむ昭和54（1979）年度から昭和58（1983）年度分の作業を行った。

この年代の新入生には、現在美術学部教員を務める者が多い（*1）。沓掛移転の年である1980年は、それまでの「共通ガイダンス」が「総合基礎実技」に改称された年であり、また1970年の改革案（研究テーマ／素材・技術別の制作室／ガイダンスからなる）が改められ、現在の学科構成につながる美術（当時は「造形」と呼ばれた）／デザイン／工芸の3科11専攻の体制に編成された時期でもある。

移転後はカリキュラムの内容も漸次変化する。それまでは、4～7月に〔イメージ〕〔対象（描写）〕〔素材〕〔手段／機能〕というふうに、全体的な基礎と美術・工芸・デザイン各分野の視点を考慮した個別課題が並び、最後にそれまでの制作経験をふまえて〔総合制作〕を行う内容だった（*2）。〔総合制作〕は7月に始まり、夏休みをはさんで9月にグループで共同制作に取り組むものである。1980年度はそれまでの枠が維持されるが、1982年度になると、〔作る〕〔描く〕〔計画する〕〔総合制作〕という、よりざっくりした大枠に再編され、個々の課題もそれまでの段階的展開から比較的自由に設定されていく。

例えば1980年度の〔総合制作〕は、地図付きのチラシをつくってキャンパス内のあちこちで大がかりな発表を提示する。1982年度の第1課題〔作る〕では、キャンパス内の空き地（現在の大学会館敷地）に穴を掘り、土器やオブジェを造り、手作りの炉で熱した鉄をたたき、草を刈って野焼きを行うとともに、各プロセスごとに詩を作る課題を組み込み、ダイナミックな物質体験に内省的な言語体験を並走させる高度な内容である（*3）。〔総合制作〕のテーマも学生自身に考えさせ、自主性の育成を重視している。

今から見れば危険さも感じさせるが、身体の大きな動きを伴う行為や物質変容の体験、自発的な実験制作は、専門に進んでからは得にくい学びをもたらしてくれるだろう。背景には担当教員の意欲とともに、狭い東山キャンパスから広い沓掛新キャンパスへの移転がある。移転当時のキャンパス内の自由空間の広さ、また男女比が現在は1：9であるのに対し、当時は約4：6と男子が多いのも、課題の内実に多少とも反映しているだろう。

アーカイブ化の作業は、今後の総合基礎実技とも地続きの課題を発見・再考させてくれることをあらためて実感する。

井上 明彦（美術学部教授）、黒川 岳（美術学部非常勤講師）、平田 万葉（美術学部非常勤講師）

*1：赤松玉女，研綿正之，高橋悟，長谷川直人，辰巳明久，松井紫朗，中原浩大，楠田雅史，渡辺信明，日下部雅生（敬称略）ら。ただし昭和56（1981）年度と昭和58（1983）年度の名簿が不明である。

*2：2016年度報告参照（『芸術資源研究センターニューズレター』第3号，2017年，9頁）

*3：担当教員は，清水水漸，甲本章人，福嶋敬恭，鶴田憲次，潮江宏三。